

Title	自然科学と精神科学の分類を回るディルタイとヴィンデルバントの論争
Author(s)	大野, 篤一郎
Citation	哲学論叢. 1985, 16, p. 89-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66831
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

自然科学と精神科学の分類を回る

ディルタイとヴィンデルバントの論争

大 野 篤 一 郎

一 『個性』論文成立の背景

ディルタイが『記述的分析的心理学に関する諸想』(*Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie*)をプロイセン科学アカデミーの研究報告として公刊した一八九四年、新カント派の哲学者で、シュトラスブルク大学の学長であったヴィルヘルム・ヴィンデルバント(*Wilhelm Windelband 1848—1915*)は、同大学の創立記念祭に際して、『歴史と自然科学』(*Geschichte und Naturwissenschaft*)と題する講演を行ない、その中で、ディルタイの名前は一度も挙げないで、ディルタイが一八八三年の『精神科学序説』(*Einleitung in die Geisteswissenschaften*)以来、一貫して主張して来た、自然科学と精神科学への学問の分類に対して異議を唱え、新しい学問の分類方法を提案した。

他方、ディルタイは、一八九五年四月二十五日、プロイセン科学アカデミーで『比較心理学について』(*Über*

vergleichende Psychologie)と題する研究報告を行なった。それは、前年、一八九四年に公刊された『諸想』の続編として構想され、精神科学を基礎づける心理学は、個性性を取り扱う比較心理学として展開されなければならぬと主張するものであった。一八九五年十月十三日付のヨルク伯 (Graf Paul Yorck von Wartenburg 1835—1897)宛の手紙の中で、彼は次のように述べている。

「先ず、私はクロイト (Kreuth)⁽¹⁾で、今後、あの書物の継続の新しい基礎となる比較心理学を執筆しました。先ず、私は以前に、部分的にはあなたのとこで書かれたものを二倍以上にふやし、書き直しました。最初の部分をあなたは数日中に受け取られるでしょう。その部分は殆ど全く新しく、ヴント (Wilhelm Wundt 1832—1920)の第二巻⁽⁴⁾を読んで、彼やヴィンデルバントによって絶えず繰り返される、内的経験の概念の持つ解き難い矛盾についての説明に対して、また、心的なものの概念を内的経験の概念と関係させ、こうして精神科学の概念を内的経験に基づけることの不可能性についての説明に対して、この基礎を正当化しようという欲求が湧きました。……私は、これらの論文が結末に達するや否や、一緒にして『比較心理学——歴史、文学及び精神科学の研究のための論文』 (*Vergleichende Psychologie, ein Beitrag zum Studium von Geschichte, Literatur und Geisteswissenschaften*)として印刷させるつもりです。⁽⁵⁾」

この手紙が書かれてから数日の間に、デイルタイは『心理学雑誌』 (*Zeitschrift für Psychologie*) 第九卷一六—一ページ以下に掲載された、ベルリン大学の同僚で、心理学者のホルマン・エビングハウス (Hermann Ebbinghaus 1850—1909) の『説明的心理学と記述的心理学について』 (*Über erklärende und beschreibende Psychologie*)と題する、デイルタイの『諸想』に対する思いがけぬ程手厳しい書評を読んだと推定される。昨年、ブーア

カンブ書店から出版されたローディとレッシングの共同編集になる『ヴィルヘルム・ディルタイの哲学のための資料』(Materialien zu Philosophie W. Diltheys. Hrsg. v. F. Rodi u. H.-U. Lessing. Frankfurt a. M., 1984)に、このエビングハウスの論文が収録されているのだが、この本の冒頭の編者によって書かれた「序論」の中に、一八九五年十月二十七日付のディルタイ宛のエビングハウスの未刊の手紙が部分的に引用されている。この手紙は、その内容から見て、彼の書評を読んだディルタイの手紙に対する返事であると思われる。このことから、ディルタイが、先に引用した、ヨルク伯宛の手紙を書いた日と、このエビングハウスの手紙が書かれた日との間、即ち、十月十三日から二十七日までの間に、エビングハウスの書評を読んだことが明らかになる。

『ディルタイ全集』第五巻の編集者であるG・ミッシュ(Georg Misch 1878—1965)の報告によると、このエビングハウスの書評に対するディルタイの反論の草稿が彼の遺稿の中に見出され、その一つは一一〇ページに及ぶもので、もう一つは四十六ページの草稿であるという。⁽⁶⁾

一八九五年十月十三日以降に、ディルタイは『比較心理学』の論文の第一章、つまり、ヴィンデルバントの批判に答えた部分を削除し、その代りに、前著『諸想』の根本的な考え方についての要約を挿入し、それに対する注の形で、エビングハウスの書評に対する反論を書こうとした。この手を加えられた草稿をディルタイは、ヨルク伯に送ったと思われる。一八九六年一月十五日付のディルタイ宛の書簡の中で、ヨルク伯は、この草稿について、「書かれたものは、うまく調整されているので、削除(複数)は目につきませぬ⁽⁷⁾」といっている。この時、ディルタイは『比較心理学』の第五章をも、後で別の論文に使用するために削除していた。また、エビングハウスの書評に対する反論として書かれた注について、ヨルク伯は「それは、実際、とても調子が和らげられています、この冷静な

形がひよっとしたら正しい形かもしれない⁽⁸⁾”といている。

ミッシュュは『全集』第五巻の編集に際して、この要約と注とを、前著『諸想』の後に注として加え、第一章に元のヴィンデルバントの批判に対する反論を復活させ、第五章も削除しない形に戻した。従って、現在、われわれが『全集』第五巻の中に見出す『個性性研究のための論文』(Beiträge zum Studium der Individualität)は、標題に関しては、ディルタイが一八九六年にプロイセン科学アカデミーの研究報告として印刷に付したものと同じであるが、内容に関しては、ディルタイがエビングハウスの書評を読む前に、即ち、一八九五年十月十三日頃に構想していたものと同じであるといえる。⁽⁹⁾

本論文では、この『個性性』論文の第一章を中心にして、精神科学と自然科学への分類を回るディルタイとヴィンデルバントの論争を扱うことにする。

二 自然科学と精神科学への分類に対するヴィンデルバントの批判

ヴィンデルバントは、先にも述べたように、『歴史と自然科学』という講演の中で、ディルタイの主張した、自然科学と精神科学への学問の分類に先ず異議を唱える。

第一に、「自然」と「精神」とを対立させる考え方は、彼によれば、古代的思惟の末期と中世的思惟の初期に支配的となったものであり、デカルト、スピノザからシェリング、ヘーゲルまでの形而上学の中で維持されて来た。しかし、この区分は、「吟味されずに分類の基礎とされるほど、確實で自明であるとは認められないであろう⁽¹⁰⁾」とヴィンデルバントはいう。このヴィンデルバントの主張の背景には、ヘーゲルにおいてはなお自明であったこの自

然と精神との区別が、十九世紀末には、自然科学の発達によってそれほど自明でなくなったという歴史的状況がある。

第二に、近世哲学においては、この対立の根底には、ロック以来の外的知覚と内的知覚（ロック自身の用語では sensation と reflection）という認識方法上の区別があると考えられるが、「最近の認識批判は……『内的知覚』を特殊な認識の仕方として仮定することを疑わしくした」とヴィンデルバントはいう。この主張の背景には、この当時、ヴント等の実験心理学が確立され、それまでの「内観法」に対して疑問が持たれるようになっていたという事情があると思われる。

この批判も、ディルタイの名前を挙げてはいないが、彼の『諸想』を念頭に置いた批判であることは疑う余地がない。例えば、ディルタイは、この論文の中で、「外的知覚とは違って、内的知覚は、覚知 (Innwerden)、体験に基づいており、直接的に与えられている」(V.170)⁽¹²⁾ といっている。

更に、ヴィンデルバントは、いわゆる精神科学の取り扱う事実が、内的知覚において与えられるということも決して承認されないと批判する。

第三に、もし、すべての科学を自然科学か精神科学のいずれかに分類しなければならぬとすると、心理学は一体どちらに分類したらよいかという問題が生じる。研究対象に関していえば、それは精神科学に分類され、他の精神科学の基礎であると考えられよう。しかし、研究方法に関していえば、心理学の方法は自然科学の方法である。何故なら、「心理学は、自然科学と同様、事実が従っている普遍的合法性則性を理解するという観点の下に、そういう目的のためにのみ、事実を確認し、集め、手を加える」⁽¹³⁾ からである。心理学が探究するのは心的出来事の法則で

ある。

このヴィンデルバントの批判は、『諸想』の中でディルタイが展開した「記述的分析的心理学」の可能性を否定し、ディルタイの批判した「説明的心理学」こそ本来の心理学であると主張しているのである。

最後に、ヴィンデルバントは、経験科学を純粹に方法論の相違に基づいて分類することを提案している。彼によれば、ある経験科学は、普遍的法則を探究し、他の経験科学は、特殊な、一回限りの歴史的事実を探究するとすれば、われわれは経験科学を自然科学と精神科学に分類する代りに、「法則定立的」(nomothetisch)科学と「個性記述的」(idiographisch)科学とに分類すべきだといふのである。形式論理学の用語を用いて表現するならば、一方の科学の目標は、全称必然判断であり、他の科学のそれは、単称断言判断である。

この科学の新しい分類法に従えば、心理学は普遍的法則を追求するが故に、「法則定立的」科学に分類されることになり、それが自然科学に分類されるべきか、それとも精神科学に分類されるべきかということは、最早問題にならなくなる。

ヴィンデルバントによれば、この方法上の区別は、知識の方法を分類するに過ぎず、知識の内容を分類するものではない。同じ対象が法則定立的科学の対象とされると共に、個性記述的科学の対象とされることもありうるということをヴィンデルバントは認めている。このことは、何が恒常的であり、何が一回的であるかは、対象をどのよな観点から考察し、研究するかという認識主観の関心に依存しており、それと相関的であるということの意味している。例えば、生物学についていうと、体系としては、それは法則定立的であるが、発生学としては個性記述的であるとヴィンデルバントは主張している。

三 ヴィンデルバントの批判に対するディルタイの反論(その一)

ヴィンデルバントの批判に対するディルタイの反論は、先ず、批判の第二点、即ち、精神科学の取り扱う事實は、専ら内的知覚に基づくのではないから、外的知覚と内的知覚の区別の上に、自然科学と精神科学との区別を基礎づけることはできないというヴィンデルバントの批判に向けられる。

先ず、ディルタイは、外的知覚を「感官の中に現われる印象が、自己(Selbst)とは区別された全体〔即ち、対象〕⁽¹⁴⁾と結びつけられる過程である」(V,243)と解する。そして、一つ、あるいはそれ以上の外的知覚が論弁的思惟(das diskursive Denken)によって結びつけられ、それによって、これらの知覚まよりよく理解され、それによって外界の認識が拡張される過程が「外的経験」(die äußere Erfahrung)と呼ばれる。

これに対して、内的知覚、あるいは覚知(Innewerden)においては、われわれの心の中の感情、思惟作用、意志作用に注意が向けられ、そこで「内的過程や内的状態の構成要素相互の間に成り立つ関係がよりはっきりと意識される。」(V,244)その際、内的事実と自我、あるいは自己の意識との結びつきが、注意が増大すると共に強調され、よりはっきり意識される。外的知覚においては、われわれの注意はわれわれの外の対象に向けられており、従って、自我は意識されていない。しかるに、内的知覚においては、注意は外的知覚と自我の意識の両方に向けられている。要するに、内的知覚は反省そのものであるといつてよい。

さて、内的知覚も論弁的思惟⁽¹⁵⁾によって連関させられるようになる。この過程が内的経験と呼ばれる。ここで「心的事実」(geistige Tatsachen)と呼ばれているのは、感覚、表象、感情、衝動、意志作用である。内的経験におい

て捉えられるこれらの「心的事実」は、ディルタイによれば、先ず、われわれの実践的生活と密接に関わる。例えば、宗教的人間が自分の内的経験について語る場合、それは神との交りについての、自分の敬虔な意志に対する情念の戦いについての、我意と利己的情緒を克服する手段についての思い廻らしを意味している。

ディルタイによれば、内的経験の概念は、自己をより厳密に知るのに役立つ限りは、より理論的な方向も含んでいる。例えば、内的経験はすべての文芸の根底にあるし、神学と道徳の基礎であり、一般心理学を初め、すべての精神科学は、この内的経験によって可能となる。こうして、ディルタイは外的経験と内的経験との区別に基づいて、科学を自然科学と精神科学とに分類する自分の試みを正当化しようとする。

彼は自然科学と精神科学との区別を外的経験において与えられる外的事実と、内的経験において与えられる内的事実との区別に基づけることには、何の問題もないと主張する。このことは、しかし、精神科学が自然科学と何の関係も持たないということを意味しない。むしろ、ディルタイによれば、「精神科学は、自然科学の基礎の上に、感覚の対象に現われる心的事実とその連関、更に、物的事実との連関を研究するのである。」(V, 243) 自然科学と精神科学の区別は、ヴィンデルバントのいうように、自然対象と心的対象との区別に基づくものではない。ディルタイは考える。そもそも「自然対象と心的対象との区別は存在しない。」(V, 248) 何故なら、対象の概念は、感覚の印象が、自己(Selbst)とは区別されたものと関係することによって制約されているからである。感覚の印象から、空間連続性において完結した持続する全体、即ち、対象が生じる。そしてこの対象の連関が自然である。このように、ディルタイは、対象(Object)という言葉を物的対象にのみ限定し、心的対象という言葉を使わず、その代りに、心的事実とか心的出来事という言葉を使っている。それでは、自然科学は心的なものだけを全く扱わないので

あろうか。自然科学が、法則に従う自然の因果連関を独立の体系へと完結するためには、有機体の形成とその段階的発達に影響を与える心的要因の代りに、脳や神経系の中の物的代表を示すことができなければならない。そこで、自然科学は、すべての心的過程は随伴現象に過ぎないと仮定することによって、物的出来事の隙間のない因果連関を作り出したのだと、ディルタイはいう。ディルタイは、このように随伴現象説を心身関係に関する自然科学的な理論と見なしていたようである。

自然科学と区別された精神科学が成立したのは、われわれが動物と人間の有機体に心的出来事を持たせなければならなかったからである。われわれは、自分の内的知覚の生の表現に基づいて、心的出来事を類推によって、他の有機体の中に転移させる。勿論、有機体が人間以外の動物である場合には、この類推は不確実である。しかし、人体に現われる内的過程は、われわれの内的知覚において与えられる内的過程と全く同質 (gleichartig) である。従って、心的事実はずべて互に類似していると、ディルタイはいう。他人もわれわれと同じく、心を持ち、心的事実を持つかどうかということは、現在でも、分析哲学の中で「他人の心」(other minds)の問題として盛んに論じられているが、ディルタイは、この問題に対して、類推推理による証明を認めるが、別の箇所では、もっと直接的な「共感」(Sympathie)や類似性によって答えようとしている。

以上の点を整理して見ると、心的事実には二つの徴標があるといえる。第一の徴標は、それが内的経験の中に与えられているということである。この内的経験において与えられる心的事実とは、一種の転移 (Transposition) によって他の対象に移される。このことから、心的事実の第二の徴標が明らかになる。即ち、「自分の内的経験の事実とは、われわれが他人の身体に属せしめる心的事実と同質であること、これに基づいて、自己の内的経験をその究極の深

みに到るまで、他人の中に再び見出すことができるということ、そして、最後に、このようにして心的世界の連関が成立するということ」(V, 256)が、心的事実の第二の徴標である。

この心的事実の連関及び精神的世界の連関を認識する科学が精神科学である。こうして、精神科学は、その内容によって、他の科学と区別されなければならないと、ディルタイは主張する。自然科学と並んで、心理学、文学、歴史学、言語学、経済学、法学、倫理学、神学、美学、論理学、国家学等が存立し、それらは精神科学という一つの連関をなしていると、ディルタイは考えている。

こうして、ディルタイによれば、自然科学と精神科学との区別は、内容に関する区別であって、認識方法に関する区別ではない。もし、ヴィンデルバントが主張するように、この自然的事実と心的事実という内容上の区別による分類の代りに、認識方法上の区別によって学問を分類しようとするならば、分類根拠の変更の不完全さが、下位分類にまで影響を及ぼす。一般心理学、精神物理学、社会心理学、比較心理学は、内容上の分類に従えば、一つのグループにまとめられるが、認識方法上の分類に従うと、バラバラになってしまうであろう。

四 ヴィンデルバントの批判に対する反論(その二)

ヴィンデルバントの批判の第三点は、もし、科学を自然科学と精神科学とに分類するならば、心理学をどちらに分類したらよいか明らかでなくなるということであつた。そして、もし、科学をその方法に関して、法則定立的科学と個性記述的科学に分類することにすれば、心理学は疑いもなく法則定立的科学に分類される。何故なら、心理学の方法は徹頭徹尾、自然科学のそれであるからである。

この批判に対して、ディルタイは次のように反論する。

第一に、仮りに、心理学の方法は自然科学のそれであるというヴィンデルバントの主張が正しいとしても、それは、科学を自然科学と精神科学とに分類することに反対する理由にはならないと、ディルタイはいう。天文学と生物学とは、どちらも自然科学に分類されているが、天文学はその理論と並んで、月の地図のように単称的なものの記述を含んでいる。同様に、生物学も、動物の諸機能についての一般的理論と共に、動物の分類の如き記述も含んでいる。従って、異った方法を持った科学を結びつけることには問題はない。それよりも、心的過程を研究対象とする科学を引き裂いて、「心理学という基礎科学を、それとの生き生きした関係を必要とする諸科学から切り離すことは、非常な混乱を招くものであらう」(V, 255)とディルタイは主張する。

第二に、心理学の方法は法則定立的だというヴィンデルバントの主張そのものが反駁されねばならない。何故なら、認識の仕方は認識の内容によって規定さるべきであるからである。ヴィンデルバント自身、自然科学の目標は法則であり、歴史研究の目標は人物(Gestalt)であるといっている。そして「個人の評価、単一なもの記述、類似のものの比較、最後に、単一性、段階付け、類似性へと向けられた因果的考察」は歴史とは切り離せないものであるが、それこそ、比較心理学のなすべき仕事である。それ故、心理学の方法は徹頭徹尾、自然科学のそれであるというヴィンデルバントの主張は一面的であり、誤っている。

また「自然科学においては、思惟は特殊なもの確認から、普遍的関係の把握へと進むが、歴史においては思惟は特殊なものを愛情に満ちて描き出すことに固定される」というヴィンデルバントの科学観そのものが、ディルタイによれば、真理の一面に過ぎない。もし、ヴィンデルバントのいう通りだとすると、経済生活の諸法則を探究す

る経済学も心理学と同様、自然科学に分類されねばならぬであろう。

自然科学も単に法則定立的でないように、精神科学も単に個性記述的であるのではなく、そこでは一般的なものと個体化とが結びついていると、ディルタイは主張する。

ディルタイの反論のこの部分は、ヴィルデルバントの主張の誤解に基づいているように思われる。何故なら、ヴィンデルバント自身、生物学は全体としては、法則定立的であるが、発生学は個性記述的であることを認めていたからである。

こうして、ディルタイは、ヴィンデルバントの、方法による学問の分類の提案を批判し、改めて内容の原理に従って、すべての科学を先ず、自然科学と精神科学とに二大別すべきであると主張する。「われわれは、内容の本性によって結びつけられているものの中に連関を探し求めねばならない。従って、われわれは、内容上の同質性が成り立っているグループを引き裂いてはならない。」(V, 256)「分類は、その中で同質性の故に、できるだけ多くの、できるだけ包括的な言明が可能になるいくつかの領域を作り出さねばならぬ。諸科学を内容に関して分類することは、真理の増大に役立つが故に、それは諸科学のためになる」(V, 258)とディルタイはいう。

これに対して、ヴィンデルバントの主張するように、精神科学の中の法則定立的な部分を自然科学に算え入れることは、真理の増大という科学の目標に何も役立たない。しかも、歴史を体系的精神科学から切り離し、精神科学の体系的部分を、単一的なものとその比較に向けられている歴史的部分から切り離す結果、生じる不利は明白であると、ディルタイはいう。

五 科学的説明についての両者の理解と論争のディルタイへの影響

最後に、科学理論の立場から、このディルタイとヴィンデルバントの論争を考察して見たい。

先ず第一にいえることは、新カント派のヴィンデルバントの方がディルタイよりもずっと明確に自然科学の論理的構造を把えていたということである。一寸見ると、ヴィンデルバントの「法則定立的」という概念は、現代の科学理論でよく論じられる科学的説明の一部にしか当はまらないように見える。しかし、彼が科学的説明、特に、因果的説明の論理的構造を正しく把えていたことは明らかである。『歴史と自然科学』の中で、ヴィンデルバントは次のように述べている。「因果的考察においては、どの特殊な出来事も一つの三段論法の形をとる。その大前提は、一つの自然法則、あるいは、いくつかの法則的必然性であり、小前提は与えられた条件、あるいは、このような条件の全体であり、結論は現実の個別的出来事である。」⁽¹⁶⁾この文の初めにある「因果的考察」という語を、「因果的説明」という語にいい直して見ると、この文は、いわゆるヘンペル||オッペンハイムの「科学的説明の論理」を日常言語でいい表したものだといつてよい。

そして、ヴィンデルバントは、科学的説明の中に、個性記述的な命題が含まれること、それ故に、それが完結したものであり得ないと主張する。彼は、先に引用した個所のすぐ後で、次のようにいつている。「ある爆発の原因は、法則定立的な意味では、われわれが化学・物理的法則として表現する、爆発可能な物質の本性であり、他の個性記述的な意味では、個々の運動、火花、震動といったものである。」⁽¹⁷⁾

例えば、ある特定の気体の爆発の原因についての説明は、次のような形で行われるであろう。「水素と酸素の混

合気体は、もし誰かが火花を飛ばすならば、爆発する。水素と酸素の混合気体が存在し、且つA君が火花を飛ばした。故に、それは爆発した。」

ヴィンデルバントによれば、この因果的説明において、大前提と小前提との間には何ら因果関係はなく、従って、もし、更に、「何故、A君が火花を飛ばしたのか」という問いが出されるならば、そのことに対する原因(あるいは根拠)を探さねばならなくなる。そして、多くの場合、究極の根拠は見出されない。こうして因果的説明は必ずしも完結しない。「個々の時間の中に与えられたものを、その究極の根拠にまで分析するのに、法則への包摂は何の役にも立たない。それ故、われわれにとって、歴史的に経験されたものの中には、不可解さ(Unbegehrlichkeit)、何か言明し得ないもの、定義し得ないもの名残りが残っている。……この把え難いものは、われわれの意識の前に、われわれの本質の無原因性、即ち、個人的自由の感情として現われる。」⁽¹⁸⁾

このように、ヴィンデルバントは因果的説明は歴史的出来事に適用された場合には、完結し得ないと考える。そして、その理由は、自由に基づいてなされた行為は、因果的に説明され得ないからである。ヴィンデルバントは、カント主義者らしく、ここに科学的思惟の限界を見出す。彼は「ここに科学的思惟の限界点の一つがあり、そこでは、それは、課題を解決することはできないということをはっきり意識しながら、僅かに課題を規定し、問いを立てることしかできないのである」⁽¹⁹⁾という言葉で、この講演を締め括っている。

これに対して、ディルタイは、『諸想』の中では頻繁に「説明する」(erklären)とか「説明的」(erklärend)という言葉を用いているが、科学的説明の論理的構造については、殆ど何も語っておらず、従って、彼が自然を説明するという場合、彼が意味していることは、現象として意識に与えられている事実を、推理あるいは仮説的な法則に

よって結びつけることによって、自然が全体として因果連関であることを明らかにするということであると思われる。

尤もディルタイが比較心理学や歴史において、「因果的考察」を認めている箇所が、『個性』論文の中に見出される。「個体の評価、単一なもの記述、類似のもの比較、そして、単一性、価値の段階付け、類似性に向けられた因果的考察は、比較心理学と歴史とに共通である。」(V, 256) この「因果的考察」という言葉が、先程引用したヴィンデルバントの用語と同じ意味で使われているかどうかは、直ちに判定し難いが、少くともこの「考察」を「説明」と置き換えることは困難である。何故なら、ここでは説明にとって重要な役割を果たす、法則については何も触れられていないからである。

ディルタイは、個体、あるいは個別的現象を因果的に完全に説明することはできないというヴィンデルバントの主張を受け入れたと思われる。しかし、彼はヴィンデルバントとは違って、個体化がどのようにして有機体の世界や人間的歴史的世界の中で行われるかを別の仕方の説明しようとしたのだと考えられる。

個体化を説明する第一の原理は、人間本性の同質性、あるいは斉一性の中に見出される。「精神科学においては、どこでも、同質性・斉一性・規則がどの範囲まで個性的なものを規定しているか、どの点から実定的なもの、歴史的なものが現われるかを回って争われる。」(V, 268)そして、個体化そのものが科学の対象になるのは比較の方法によつてであると、ディルタイは主張する。そして、精神科学全体の基礎科学としての心理学も、比較科学となることによつて、精神科学のこの傾向を助長し、この方向への進歩を促進するのに貢献できるだろうとディルタイはいう。

比較の方法は、必然的に類型 (Typus) の概念を必要とする。それは、ディルタイによれば、ギリシャ人が、彼等の自然科学の方法として確立したものである。そして、近代においては、比較の方法を説明の方法と共に用いたのは生物学、特に生物学的形態学であった。こうして、有機的世界の中で、どのように個性化がなされるかを研究することによって、自然科学は精神科学との境界線すれすれのところまで近づいた。そして、それと対応して、人間と社会にも比較の方法が適用されるようになった。「この同じ方法がどのように精神科学にも転用されるようになったかを認識することが重要である」(V, 316) という文章で、ディルタイの『個性性』論文は結ばれている。

しかし、ディルタイは、この記述的分析的比較心理学によって精神科学の客観的妥当性を根拠づけようという中期の試みを放棄して一九〇〇年以後には、解釈学によって精神科学を基礎づけようと試みる。

この方法の変更が、よく指摘されるように、エビングハウスの批判の影響であったというのは事実であろうが、ディルタイ解釈学の中心問題ともいえる個体の理解の問題に、ディルタイの注意を改めて向けさせたのは、むしろヴィンデルバントの批判であったと考えられる。

また、精神科学の自然科学との区別の問題に関しても、ヴィンデルバントの批判は、ディルタイに改めて反省を迫るだけの重要性を持っていたと思われる。そのことは、一九〇五年から一九一〇年頃までの、ディルタイの最晩年の著作を集めた『全集』第七巻の中に『精神科学の区別』と題する論文が四篇も収められていることから明らかである。

注

- (1) バイエルン州のテーゲルン湖南方約一〇キロのところにある保養地。
- (2) 「あの書物」とは『精神科学序説』を指していると思われる。
- (3) 『個性性』論文の第一章を指す。『ディルタイ全集』(Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften*) 第五卷 二四二―二四三ページから二五八ページまで。
- (4) ウントの『論理学』(*Logik*, 2Bde.) の第二巻を指す。
- (5) 『ヴァイルホルム・ディルタイとムサル・ヨルク・フォン・ヴァルテンブルク伯との往復書簡』(Briefwechsel zwischen Wilhelm Dilthey und dem Grafen Paul Yorck von Wartenburg 1877-1897, Hrsg. v. Siegrid v. d. Schulenburg, Halle, 1923, Neudruck, Hildesheim/New York, 1974) 一八八ページ以下。
- (6) 『ディルタイ全集』第五卷、四二三ページ。
- (7) 『往復書簡』二〇二ページ。
- (8) 前掲書、同ページ。
- (9) それでは、何故、ミッシェは一八五五年十月十三日の書簡の中で、ディルタイが挙げている標題にしなかったのかという疑問が生じる。実際、『個性性』論文を読んでも見ると、この書簡の中で述べられた標題も、適切でないことが分る。つまり、この標題では、「歴史・文学・精神科学の研究」となっているが、実際には歴史についてはまとまった叙述がなされておらず、精神科学について書かれている第五章も途中で中断されている。
- (10) Windelband, W., *Präudien*. Tübingen, 1924, Bd. II, S. 142.
- (11) *Ibid.*
- (12) 『ディルタイ全集』第五卷、一三九ページを指す。以下、『全集』の巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で表わす。
- (13) *Präudien*. Bd. II, S. 143.
- (14) 「」の中は筆者の補足。
- (15) 本論文では「geistig」というドイツ語を殆ど「心的」という日本語に翻訳した。その理由は、原論文においてディルタイ

イはこの語を広い意味で使っており、「心的」と訳す方が原意に近いと判断したからである。

- (16) *Präjudien*, Bd. I, S. 158.
- (17) *Ibid.*
- (18) *Ibid.*, S. 159.
- (19) *Ibid.*, S. 160.

(神戸女学院大学文学部教授)